ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto

プレスリリース

平成 30(2018)年 5 月 30 日配信
[本リリース発信元]ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)

岡田利規(チェルフィッチュ)作・演出
ミュンヘン・カンマーシュピーレ劇場
『NŌ THEATER』

【ドイツ語上演／日本語・英語字幕】

日時:2018 年 7 月 6 日(金)～8 日(日) ＜全3ステージ＞
会場:ロームシアター京都　サウスホール

[本リリースに関するお問合せ先] ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団) 担当:松本、長野
電話:075-771-6051(9:00～17:00) FAX:075-746-3366 E-mail: press@rohmtheatrekyoto.jp

ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto

プレスリリース

ドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシュピーレにてレパートリー作品として発表された、チェルフィッチュの岡田利規による話題作。日本国内での上演は、ロームシアター京都のみ。

© Julian Bauman

ドイツ有数の公立劇場として知られるミュンヘン・カンマーシュピーレにて、日本人演出家としては初めて 3 シーズンにわたるレパートリー作品の演出を務める岡田利規（チェルフィッチュ主宰）による話題作が、ついにロームシアター京都に登場！日本国内での上演は、ロームシアター京都のみです。
本作で岡田が取り上げるのは、日本最古の舞台芸術「能」。その様式を用いて、資本主義に飲み込まれている現代日本の姿を描き出します。音楽は即興演奏を行う現代音楽家・内橋和久が担当。京都で募集したエキストラが、ミュンヘン・カンマーシュピーレ劇場専属俳優と共に出演する特別バージョンをどうぞご期待ください。

―――私にとって重要なことは、能の形式がきわめて演劇的だということで、その演劇的であることの度合いは、私にとっては、たとえば能が〈日本的〉であることの度合いなどよりずっと大きい。（岡田利規）

ポスト・パフォーマンストーク登壇者決定！
7 月6日（金）
岡田利規×横山太郎（能楽研究者）

7月7日（土）
タールン・カーデ（ミュンヘン・カンマーシュピーレ劇場　ドラマトゥルグ）×橋本裕介（ロームシアター京都　プログラム・ディレクター）

作・演出：岡田利規（チェルフィッチュ）
音楽・演奏：内橋和久
翻訳：アンドレアス・レーゲルスベルガー
出演：マヤ・ベックマン、アンナ・ドレクスラー、トーマス・ハウザー、イェレーナ・クルジッチ、シュテファン・メルキ
美術：ドミニク・フーバー　衣裳：ペレット・シャード　照明：アンドレアス・レーフェルド　ドラマトゥルク：タールン・メルキ

製作：ミュンヘン・カンマーシュピーレ劇場
主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）／独立行政法人日本芸術文化振興会、
ドイツ連邦共和国外務省、ゲーテ・インスティトゥート

【作・演出：岡田利規（チェルフィッチュ）インタビュー】

岡田利規が演出を務める本作が、7 月に待望の来日上演！ドイツの公立劇場のシステムや、「能」という様式の持つ可能性について、橋本裕介（プログラムディレクター）がインタビューを行いました。

インタビュアー：橋本裕介（プログラムディレクター）
インタビュー編集：高嶋　慈

ミュンヘン・カンマーシュピーレと「レパートリー」のシステム

橋本：まず、ミュンヘン・カンマーシュピーレはどんな劇場ですか。

岡田：ドイツ南部のバイエルン州最大の都市、ミュンヘンの中心部に位置する市立の劇場です。2016 年から、一シーズンに一つのレパートリーをつくるという仕事をそこでさせてもらっています。ドイツの劇場では、一つのシーズンにかなりの数の新作レパートリーをつくり、それらを日替りで上演します。毎晩違う演目を楽しめるので、お客さんにはすごく良いシステムです。でも運営する側にしたら、毎日舞台セットを建て込んでは撤去してを繰り返すわけで、なんて大変なことをやってるんだろう、と最初は非常に驚きました。ミュンヘン・カンマーシュピーレには、客席のキャパシティが 500～600 名ほどの一番大きな劇場と、200 名ほどの中規模の劇場と、100 名程度の小さな劇場と、3 つの劇場があり、それぞれがレパートリーを持って、日夜上演を行っています。

橋本：レパートリーを数年間にわたってつくることを依頼された経緯について、教えてください。

岡田：2015/2016 年のシーズンから、ミュンヘン・カンマーシュピーレの芸術監督がマティアス・リリエンタールさんに交代しました。彼は以前、ベルリンにある HAU という国際的なプログラムを意欲的に企画・紹介する劇場の芸術監督を長く務めていたのですが、その時チェルフィッチュは毎年のように HAU で公演していたんです。その時から続いている関係がきっかけになっています。カンマーシュピーレでレパートリーをつくってみないかという誘いを受けた時、僕は、ごくシンプルに、その新しいチャレンジをやってみたいな、と思いました。ただ、ドイツの公立劇場事情を知る関係者には、わりと心配されました（笑）。非常に独特なドイツの公立劇場のシステムに巻き込まれ、翻弄されて、疲弊するんじゃないかと。でもそんなことは全然なかった。マティアスを中心としたカンマーシュピーレのチームが、良い環境を整えてくれていて、その中でしっかり作品づくりができています。マティアスは、保守化したドイツ公立劇場シーンを、国際化によってかき乱そうとしています。オーストリアとスイスのドイツ語圏も含めて「ドイツ演劇」と言いますが、その外の非ドイツ語圏の演出家をプログラムに入れるというコンセプトの下、僕も呼ばれています。レパートリー制作のために、8 週間ほどミュンヘンに滞在するのですが、そうするとドイツのアーティストはもとより、イランの演出家アミール・レザ・コヘスタニや、レバノンの演出家ラビア・ムルエなど、色んな地域の演出家にも会える。とても楽しいです。

『NŌ THEATER』と演劇の形式としての能

橋本：7 月にロームシアター京都で上演する『NŌ THEATER』は、どういうきっかけで生まれた作品ですか。

岡田：マティアスはドラマトゥルク出身の人で、つくり手が新しい方向に行くポテンシャルを開くことにすごく長けていて、軽い雑談中などに、色んなヒントや刺激を与えてくれます。例えば、僕は 2 年前、「日本文学全集」（河出書房新社）の企画で、能の謡曲や狂言の現代語訳をしました。僕が「能の形式はとても面白い」と言ったら、「それをやってみないか」ということになりました。僕が演劇をつくる者として能に一番惹かれる点は、能という演劇の形式や物語り方の構造が、非常に演劇的に強く、良くできている点です。既にあるオリジナルの演目を現代的に翻案するというのではなく、能の形式を使った新しい作品をつくりたいと思いました。

橋本：『NŌ THEATER』はどんな作品ですか。

岡田：能が演劇の形式としてすごく強いと思う点の一つは、主人公が幽霊であることです。未練や満たされない思いを抱えて死んでしまった人物が幽霊として出てきます。死んではいるけど、「幽霊」として生きているので、未練や自分に起こった出来事について舞台上で話すことができます。満たされない思いを抱えて死んだ人物は、多くの場合、その時代の社会的な状況が原因で死んでいます。だから、その人たちの満たされなさを描くことで、そのような思いを経験させてしまった社会について告発することができる。そこに興味がありました。『NŌ THEATER』では二つの能―「能」と言う時にいつも、ちょっとだけためらいが生じるのですが（笑）―、が上演されます。ひとつは、「罪の意識」を扱ったものです。オリジナルの能は仏教的な価値観に基づくので、例えば「殺生」は罪とされます。それに該当する現代における「罪深いもの」として、「金融」があります。現代では、ある意味では戦争以上に、「金融」が人々を苦しめ、殺していると言えるんじゃないか。そういうわけで、「金融をめぐる能」を書きました。もう一つの能は女性が主人公です。「フェミニズムの能」と言えるかもしれません。能には、例えば、男だったら戦に出て武勲を上げられるけど、女だからという理由でできない。そのことにフラストレーションを持っている女性が主人公の話もあります。現代でも通用するテーマですよね。舞台のセットは、東京の地下鉄のプラットフォームです。舞台美術のドミニク・フーバーさんのアイデアで、素晴らしい発想だと思います。二つの能の間に、ちょっとした狂言もあります（笑）。

橋本：日本での上演にあたり、観客に対してどんな作用を及ぼしたいと考えておられますか。

岡田：現在の日本が舞台で、自分たちの社会が直接的に扱われているので、ミュンヘンの観客に対して起きている作用よりも強いものが起きたらいいなと思います。ドイツの役者がドイツ語で演じるので、日本社会を扱う作品を字幕を通して見ることは、きっと面白い経験になるのではとも思います。また、この作品は本物の能ではないからこそ、むしろ能のエッセンスがくっきりと見えてくるようなものかもしれないという期待もあります。

橋本：ありがとうございました。

【プロフィール】

岡田利規(おかだ・としき)
演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰。1973 年横浜生まれ、熊本在住。従来の演劇の概念を覆すような作品作りで国内外で注目される。主な受賞歴は、『三月の 5 日間』で第 49 回岸田戯曲賞、小説集『わたしたちに許された時間の終わり』で第 2 回大江健三郎賞。主な著書に『遡行　変形していくための演劇論』、『現在地』(ともに河出書房新社)など。2016 年より、ドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシュピーレのレパートリー作品の演出を 3 シーズンにわたって務めた。

ミュンヘン・カンマーシュピーレ劇場
ドイツ語圏で最も重要な劇場の一つ。設立当初より、現代の諸相に共鳴する作品を上演し、芸術的に革新的で、現代的かつ社会政治学的な視点を持った国際色豊かな公立劇場。2015/2016 年のシーズンから、マティアス・リリエンタールが芸術監督を務める。著名なアーティストだけでなく、若手の作家を起用し、フィリップ・ケーヌ、ラビア・ムルエ、岡田利規をはじめとする海外の演出家を招聘するダイナミックなアプローチは、「新しいタイプの公立劇場」「ミュンヘンの味」「クラブ」「ハイブリッド」と言った言葉で形容される。

【公演概要】
『NŌ THEATER』【ドイツ語上演／日本語・英語字幕】
日程:2018年7月6日(金)　19:00　□
　　7日(土)　15:00　□◎
　　8日(日)　15:00　◎
□＝ポスト・パフォーマンストークあり　◎＝託児サービスあり(有料、要予約)
※各公演受付開始は開演の1時間前、開場は開演の30分前

チケット発売中
チケット:全席指定　一般4，500円　ユース(25才以下)3，500円
※ユースチケットをご購入の方は、公演当日、証明書のご提示が必要です　※未就学児童入場不可

チケット取扱
■ロームシアター京都オンラインチケット(要事前登録・無料)　https://www.e-get.jp/kyoto/pt/
■ロームシアター京都チケットカウンター(窓口・電話)　TEL.075-746-3201(10:00～19:00、年中無休、臨時休館日のぞく)
■京都コンサートホールチケットカウンター(窓口・電話)　TEL.075-711-3231(10:00～17:00、第 1・3 月曜休※祝日の場合は翌日)
■チケットぴあ　TEL. 0570-02-9999　[P コード　485-720] https://t.pia.jp/
■ローソンチケット　TEL. 0570-084-005 [L コード　53320] https://l-tike.com/
　　TEL. 0570-000-407(オペレーター対応　10:00-20:00)

［本リリースに関するお問合せ先］ ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)　担当:松本、長野
電話:075-771-6051(9:00～17:00) FAX:075-746-3366　E-mail: press@rohmtheatrekyoto.jp